
残念な使い魔

とゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残念な使い魔

【Zコード】

N1160S

【作者名】

とげ

【あらすじ】

オリ主がサイトの代わりに召喚されます。

作者が「やつべ、召喚されてえ。パンツ洗濯してえ。」とのことで、勢いで書いた小説です。ハイ。

チート能力をふんだんに使って、すごい厨二な作品にしたいと思つてます。

処女作？なのでおかしな点があるかもしませんが、それでも読んでくれれば、作者が鼻血を吹き出して喜びます。

プロローグ（前書き）

今更だが書いた。後悔はしていない。
初心者ですので、感想とかお願いします。

プロローグ

「たつだいまー。」

返事は無い。今、俺が住むこの家には、ただいまーおかえりー。何てお決まりの流れは無いのだ。そう、あの日から・・・・・。
なーんてな。そんな、親が死んでから俺は一人暮らしなんだZE
みたいな設定は無いぜ！

バカッ。冷蔵庫を開けると、そこには異次元へと繋がる鏡のような物があった。

ハタン。何事も無かったかのようだ。冷蔵庫を閉める。

うん、何かの見間違えた。そうに違いない。どうとしか思えない。パカッ。再び冷蔵庫を開ける。そこには異次元へと繋がる鏡のような物が・・・パタン。

アアアアンツ！

あー！これ
夢なんだぞ？そこ、じやん
こんなのが現実じゃありえな
いもんな。

「夢だ。これは夢だ。夢だったら何をしても大丈夫だ。今、ここで少し体に衝撃を与えたま、俺は、五時限目の国語の授業中に、先生に注意されてみんなに笑われながらも、この訳わかめな夢から抜け出せるはずだ。」

そう言いながら俺は、近くに立てあつた包丁を手に取つた。

そう言つと俺は、固く握つた包丁で、左手首を思いつ切り、突き刺した。

(… < <) …

血がこれでもか! という程出ている。しかし、痛みが無い。と、言う事は? そう、これは夢だったのです。って . . . あれ? 何だか目眩が . . . 。

「深く刺し過ぎたか . . . 。みんな、現実逃避はほどほどにな 」

視界が周りから黒くぼやけていく。あ、死んだかも。

「ねーねー起きてよお~。はう~。」

「ん . . . ? 何だこの口リボイス。何か凄い口リ声の人俺を起こさうとしてるな。」 こには早く起きた方が良いかも。
「 つて、あれ? 何で? えつ、アレつてやつぱり夢だったの? いやいやいや。えつ? マジで? 本当に夢だったの?
まあ、とりあえず起きた方が良いかも。よし、起きよう。うん。
(よつこ) よし . . . つて、あれ! ? 嘁れねえ! ! !
「あつ、やつと起きた。」

「起きていきなりべらべらと煩い奴じゃの。」

(えつ ? 僕喋つてないじゃん。何言つてんの?) の爺さん。)

「えつ? 僕喋つてないじゃん。何言つてんの?) の格好いいお爺様。」

「

(! ?)

「?

おいおいおいおいおい。」 の爺さん、俺の考えてる事がわかつて
つぽいぞ! ? しかも、ちょっと変えてやがる . . . !
しかし、この口リつ娘は何が起こつてるか分かつてなさそつだな。
つてことは、分かつてるのはこの爺さんだけか . . . 。
あつ! そんなことよつこにはどこなんだ! ? 俺は死んだんじゃなか
つたのか! ?

「ああ、確かにお主は死んだ。そして、」 こには死後の世界じゃ。つ

いでにわしにはお前の考へてる事がわかる。」

(マジかよ・・・。)

「お主、まだ死にたくないじゃろ?」

(あつたりまえだろ!俺は、まだ13年しか生きてねえんだぞ!)

「そう言つと思つたわい。お主、これが何かちゃんと分かつてあるな?」

爺さんは、そう言つて一カツと笑つと、杖を小さく振り、田の前にあのゲートを出した。

(うん、どう見てもゼロ魔に出てくる、あのゲートだな。)

「わかつておるのなら良い。お主には、死んでほしくないから。これを通つて、ハルケギニアに使い魔として召喚してもらひ。」

(わかつた。あれ?死んでほしくなくてハルケギニアに送るんだつたら、どうして生きてた頃にゲートが出てくるんだよ。)

「それは、お主に良い思いをしてもらおうと思つたからじゃ。お主がその作品が大好きじゃからの、作品の中に入つたら喜ぶと思つてな・・・。」

(そういう事が!ありがとづー・じやあ早速・・・。)

「まあ待て。焦るな。」

(まだ、何かあるのか?)

「お主、欲しい物はあるか?」

(あつ!そつか、結構用意とかあるもんな。あー、でも服・・・は、はげつ!よく見たらかなり血が付いてるじゃん・・・。ま、いつか。)

「うん?欲しい物は無いのか?何でも良いんじやぞ?」

(うーん。何でも、何でもか・・・。あつ!じやあ特殊能力付けてくれよ!あ・・・しかし、異端とかと思われないか・・・?あ、やっぱ、さつきの無し!魔法使えるようにしてくれ!)

「魔法だけでいいのか?わしは別にどつちも使える方が便利じゃと思うが・・・。」

(そつか、それもそだな。うん。バレなければ良いだけだもんな。うん。そうだ、そうしよう。)

「それで良いんじゃな？」

（おう！良いぜ！もう準備万端だ！）

「よしーなら、今の状態を確認するぞー順に言つていつてくれ！」

（えーと。服は灰色の無地の長袖の上に黄色のパークー。そして、色が落ちすぎて白くなつたジーンズ。パンツは青いトランクス、靴下は白のショートだ。そして、いつのまにか履いていた、銀色の合成の皮を使ったオサレ靴だ。よし、杖を忘れてた！）

「それはもうこれで良いじゃろ。ほれ、それをくれてやる。」

爺さんはこっちに向けて30cm位の黒く艶のあるつるつるの杖を投げてきた。

（ありがとよ。んじゃ、そろそろ行くわ。）

「おお、もう行くのか。がんばるのじゃぞ。」

（おつー色々ありがとうなー）

そして、俺は、あのゲートに思いつ切り飛び込んだ。死んだ時とは違う、視界が突然、白く光つた。

「・・・もう少しくらい可愛い曾孫といったかつたのぉ。・・・死ぬ

なよ。拓人。」

「あたし、忘れられてる・・・。」

プロローグ（後書き）

自分ではかなり書いたつもり。

伏線は貼られて・・・いる・・・のか？

読んでくれた方、ありがとうございました。

追記：誤字修正しました

第一話 のよみがわの。(前書き)

頑張つたんだけど、テノペースが悪くなつた。

第一話、のよつなもの。

「あんた誰？」

あのゲートに飛び込んで、突然、声を掛けられた。

どうやら俺は本当に、ゼロ魔の世界に召喚され、今、目の前にいるルイズの使い魔になつたらしい。

「俺は澄川拓人だ。よろしく。」

そう言い、俺は手を前に軽く出した。

「どこの平民？」

俺の前に出した手を、完全にスルーされてしまった。俺は、なぜだか少し恥ずかしい気持ちになつたので、手を引っ込んだ。

「ルイズ、サモン・サー・ヴァントで平民を呼び出してどうするの？」何と答えようと正在していると、キルケがそう言つた。すると、ルイズ以外の全員が笑つている。あ、タバサも笑つてなかつたわ。てゆーか、みんなで囲んで笑つてるとか、端から見たらいじめ現場としか思えないぞ。

「ちょ、ちょっと間違つただけよ！」

今、俺の目の前にいるルイズが、可愛い声で怒鳴つた。こんな可愛い子の穿いたパンツを我が物に出来るなんて……何て興奮するんだ！勃起が止まらねえ！

俺がハアハアしてるとルイズがこっちに戻つてきた。言い争いが終わつたらしい。

「ねえ。」

「何でしようか。」

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから。」

やつべえ、更に興奮してきた。やつべえ。何かもう呪文だか何だかしらんが唱えてるけど、聞こえないほど興奮してる……パンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパン

「はあはあはあはあはあはあはあはあはあ。

「・・・の者に祝福を与える、我の使い魔となせ。」

ପାତ୍ରାବ୍ଦୀ

気付いたらキスしてた。柔らかい唇が俺の唇に当たるだけのキス。

俺のファーストキス。

ふう

いや、違うか。

ルイズはツルベールに報告にいつている。あつ、また何

あの生徒、あとで殺しとかないと

洪水とかゼロとか、聞こえてくる。何かどーでもよくなつてきた。

馬染める氣かしねえ

۷۰

「すぐ終わるわよ。待つてなさいよ。使い魔のローンが刻まれてい
るだけよ。」

「ふう・・・。」
「そうは言つけどー滅茶苦茶、熱いぞー! つて、あ、収まつたわ。」

右足を曲げて、左足を伸ばした、二角座りもどきをしていると、みんな大好きツルベール先生が、近寄ってきて、俺の左手の甲を確かめる。

「ふむ・・・珍しいルーンだな。」「ガンダールヴですよ。先生。

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ。」

先生がそう言つと、生徒の皆が宙に浮いた。やっぱり魔法つてすごいね。後で俺も試さないとな。

「ルイズ、お前は歩いてこよー。」

あいつフライはおらか、レビューションやねおともにできないんだぜ。」

「その平民、あんたの使い魔にお似合いよー。」「よし、あいつらも後で殺す。

氣付くと、ルイズと俺だけが残されていた。さて、どうしたものか。思つてているとルイズがこっちを向いて怒鳴つた。

「あんた、なんなのよー。」

うおっ。ちょっとビックリした。

「なんなのって言われても・・・。それよりみんなのどこに行かなくともいいのか?」

「うるさいわよ! 平民のくせにあたしに指示しないでよー。」

カチンときた。そうだ、最初の方は俺はそんなにルイズが好きじやなかつた。

「わかった、わかった。わかったから。とりあえず、授業あんただろ

う? 戻つた方がいいぞ。」

「あたしに指示するなって言つたでしょ!」

うわあ・・・だんだん、めんどくさくなつてきた。

「わかった。すまなかつた。だから、もう、許してくれ。頼む。」「

こいつ時はとりあえず謝つときや何とかなるんだ。

「契約の方法が、キスなんて誰が決めたの?」

「知らん。ブリミル様だつけ？その人じやねーの？」

「あたしのファーストキス返してよ！」

何て理不尽な怒り方だ、そう思いながら、俺は気絶した。

第一話、のよつなむの。（後書き）

何かおかしいかも・・・(; ; ^ ^)
呼んでくれた方、ありがとうございました。

第一話 のよみがわの。(前書き)

もしも投稿出来たのは良ければ……もとよりないかも……。

第一話、のようなもの。

チュンチュンチュンチュンチュンチュン・・・

小鳥の囁りで、俺は目覚めた。

しかし、何故だか体のあちこちが、痛い。

何故？理由は簡単だ。ここは、ルイズの部屋で、俺は床で寝ていたからだ。

今日中に、藁を取つてくるか・・・。

そう思いながら、立ち上ると、何かが、俺の体から落ちた。

「おい。今、何が起きた。俺には、パンツが落ちてきたように見えたぞ。」

一度、田を擗り、何かの落点を見た。やがて、ピンクのマント
らしげ、レース生地のパンツがあつた。

俺はそれを音速を超えたんじゃないかと疑ふほど速く手に取つた。

そして、慌ててまわりを見回すと、そこにいるのは、可愛らしい寝顔をしているルイズと、冷や汗が止まらない俺の、一人だけだった。それだけを、確認すると、またパンツを見た。

今、俺はパンツを持っています。そのパンツの穿き主は、俺の目の前で眠っています。

クソッ。パンツを口に入れたくなる衝動に駆られる。

お、俺は一体、何を考えているんだ・・・！もつと、常識的に物事を考えるんだ。パ、パンツ・・・それも、俺のご主人様のパンツを、口に入れる・・・だと・・・なんて、興奮するんだ。

やるしか・・・ないー。
「まあまあまあ「んつ・・・。」ー?」

俺の口の中まで、10cm。そこで、ルイズが寝返りをした。

ダメだ。やっぱり、やめよ。こんな事したって、何にもならない
はずだ。

といひで、起こさなくて良いのかね？もう、朝だよ？よし、起こさう。

「ルイズ。ルイズルイズルイズ。起きよつぜ。もう朝だぞ。」

ユサコサと、ルイズを揺らして、起きてもらおうとする。

それと同時に、ルイズから甘い香りが、漂つてくる。

ルイズを揺らす右手から汗が、滲み出でくる。

ここに来て良かつた・・・。爺さん、ありがとう。

「うーん・・・。ほわあ～あ。」

おつ。ルイズが起きた。呑気にあくびをしている。

「おはよう。ルイズ。」

「おはよう。・・・って、誰よあんた！」

おいおい・・・。どうやら、俺の御主人は、使い魔であるはずの俺を覚えていないようだ。

「折角、召喚した使い魔を忘れるなよ・・・。ルイズ、俺は拓人だ。昨日、召喚した、ルイズの使い魔だよ。」

俺は、軽く両手を上にあげて、やれやれ、といつたポーズをとりながら言うと、ルイズはやつと思いついたのか、ハツとした表情をすると、また、元の表情にもどった。

「あー。そういえば召喚したわね。後、そのルイズつて軽々しく言うのやめなさい。」

「わかりました。御主人様。」

わかりましたわかりましたわかりましたよ。

あー、何かこのやりとりめんどくせえな。・・・逃げるか。

「それでは、御主人様。私は洗濯をしてまいりますので・・・。ではっ。」

俺はそういうと、ルイズが着ているネグリジェを、やや強引にも脱がせ、逃げるようにして部屋を出た。

その間、ルイズが何かを言つていた気がするがこの際、気にしない。さあ、水汲み場はどこだ？

外に出て歩き回っていたら、マーライオンの顔だけバージョンがありました。わかりやすいですね。

「さて、洗うか。」

まず、ネグリジェを洗おう。

(・_・) ()

「しまった・・・。石鹼が無い。」

やつちまつた。やつちまつたぜ。石鹼が無いよ。どうすればいいの。うーむ。あつ、そうだ。魔法で何とかなんだろー。

「そうと決まれば、早速・・・。」

そして、俺は、腰のベルトと挟んでおいた、杖をとった。あつ、やつべえ。

「おー、呪文なんて知らないぞ。」

やつちまつたよ。俺は、魔法の呪文なんて全く知らないぞ。まあ、適当にやつてたら、何とかなるだろ。

「まずは、練習からだよな。えーと、イメージが大切なんだつけ。てか、洗濯のイメージってなんだよ。あー、もう知るかよ。どうこでもなれ。

「ほいっとな。」

水汲み場に向けて、杖を振つてみると、何も起きなかつた。何だか、恥ずかしい気持ちになつたので、杖を無言でしまつた。

「俺、何やつてんだろ・・・。」

もう、いやだ。帰りたい・・・。

「あの・・・?どうかされましたか?」

絶望していると、後ろから声を掛けられた。

振り向いてみると、そこには、この世界に来て見かけなかつた、黒い髪の持ち主、シエスタだつた。

「えつ?あ、その、御主人様に洗濯を命じられてね・・・。」

「あつ、もしかして、あなたが、噂の使い魔さんなんですか?」

「あ、はい。そうです。多分、その噂の使い魔だと思います。」「

「そりなんですか～。あつ、手伝いますっ。」

「あ、ありがとうございます。」

シエスタさんはこりない子だと思つててすみませんでした。何なの、この天使。

洗濯が終わつたと思つたら、今度は干すのまで手伝つてくれたよ。感謝してもしきれないね。

「ありがとうシエスタ。助かつたよ。」

「また何かあつたら。声を掛けてくださいね。では。」

シエスタは、そう言い軽くお辞儀すると、どこかへ去つて行つた。ありがとうシエスタ。本当にありがとう。

「しかし、暇になつた。どうしたものか。」

うーむと唸つていると、何だか寒くなつてきた。

「うー、寒いなー。あつ、そういえば、特殊能力をもらつたらしいけど、どんな特殊能力なんだ。」

そーいえば、何の能力が使えるのか全く知らない事を思い出した。

「適当に念じたら何か起くるんじゃね？ファイア！」

そう言つと、目の前が白く光つた。すると、近くにあつた木が灰になつて風と共に流れていつた。

：（・・・。・・・。・・・）：

「えつ？えつ、これ。えつ？どつ、えつ？これが特殊能力？えつ、最強すぎね？」

拓人は新しい能力、ファイアを覚えた！

「やつべえ。どうしよう。エルフだと思われたらどうしよう・・・。あつ、杖持つてさつきのやれば良いんじゃないか！俺、天才じゃね？」

これしか使えないってわけじゃないだろ。今度試してみよう。被害の出ないとこりで・・・。

「あつ、そろそろ、洗濯物を取りにいかないと。」

俺の冒険はまだ始まつたばかりだ！

「何だつたの？さつきの・・・。あんなのスクウェアクラスでも使えないはず・・・。彼は何者・・・？」

拓人のいた広場の上空で、そう呴く声がした・・・。

青い風が吹くと、もうそこには誰もいなかつた・・・。

第一話、のよつなむの。（後書き）

オリジナルな展開きました。

感想とかよろしくお願いします。

第三話、のよつなむの。（前書き）

色々と突っ込みどころがあるかもしれません、いきなり決闘シーンです。

第三話、のよつなもの。

「決闘だ！」

鼻血と怒りで顔を真っ赤にしたギーシュが、そう俺に叫んできた。
やつちました・・・。

外で遊んでいて授業に参加しなかつたら、ルイズに朝食をを抜かれた。

何て理不尽なんだ、と思いつつ広場の近くにあつた木の葉を食べてみると、それがまた美味しいので一口、一口、三口ともさも食べていたら、気分が悪くなつたので、口から緑色の何かを盛大に木の根元にぶちまけているところをシエスタに見つかり、すぐ心配された。

そして、そのまま厨房に連れていかれると、先程まで食べていた木の葉と比べ物にならないほどに美味しいシチューをもらつた。嬉しくて泣いていると厨房のみんなに哀れみの視線を受けたかと思うと、マルトーさんに泣きながら抱かれた。

感謝の気持ちを込めてお辞儀をして帰ろうとするが、何かあつたらここに来い、と言われ、お土産のクッキーまでもらつた。

暇なので歩いていると、ギーシュ達が話しているのが見えたので眺めていると、ギーシュが壇を落としたのが見えたので、拾つてやるとケティとモンモンがやってきて順番に殴つていつたので、俺も流れに乗つて顔面を殴ると、ギーシュが怒りだした。

そして今に至る。

(・_ゝゝ_)

やつちました。本当にやつちましたわ。それ以外に思いつかないわ。

「あんた、勝手に何やつてんのよー。」

何故かルイズがやつてきた。

「ああ？俺にもよくわからん。」

「ああー！もうー何でも良いからとっとギーシュに謝りなさいよ！」

「大丈夫だ。ギー・シユぐらい片手でも勝てる自信がある。まあ温かい目で見ててくれるよと助かるよ。」

それだけ言って、ギーシュの方まで歩いていった。やつぱりルイズが何か言つていたが、無視してきた。

広場はすごく盛り上がっていた。

「諸君！決闘だ！」

「ウオオオオオオオオッ！！！」

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「おい！」

シーン……無駄に盛り上がった観客を黙らせる。

故人不以爲子也。故人不以爲子也。

ふつ、決ま

「う・・・。」

が
揺
れ
た。
。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「オオオオオオオオオオオツ！――！――！――！」
ふつ、今度こそ決まつたな。

「き、貴様ア……。僕より目立ちやがつて！殺してやる！行け！」

ギリシューが突然、フルギューリーを突進させてきた。

「うおつと。」

しかし、特殊能力によって、動体視力を強化した俺にとつては、全てがスローモーションに見えるので、簡単に避けることが出来る。

「行け行け行けエ！ワルキュー！」

「よつ、はつ、ほつ。」

どんどん数を増やしていくが、そんなの俺には関係無い。全てかわしきつた。

「おのれ、ちよこまかと！」

避けるだけじゃ駄目だよな。よし。

「おい、もつとしつかりやつてくれよ…」

「！？」

一気に距離を詰め、思いつ切り腹を蹴飛ばしてやつた。

「ぐはあ！あ！ああああ！」

5M位飛んでいった。ギーシュが仰向けになつたまま、咳き込んでいる。

そういえば、ワルキューを忘れていた。

「ふんつ！」

ワルキューを頭から縦にぶん殴つた。

「あれ？ 青銅つて案外、柔らかいんだな。」

一体のワルキューが、殴つただけで半分位の大きさになつた。次に、三体まとめて腹を横から蹴つた。すると三体全てが半分に分かれた。

「ワルキューは全て片付けたな。さてと。」
ギーシュのところまで歩いていった。

「おい、もう終わりか？」

「な、何を言う。ゲホッゲホッ！」

「おい、ここで負けを認めて、モンモランシーから手を引くか、ここで俺に殺されるか、どっちが良い？」

「ふ、巫山戯るなア！」

「ふつ、まあ良いや。そろそろ疲れたんでな。・・・俺の勝ちだ！」

「ゴフオツ！」

倒れているギーシュの腹を、思いつ切り踏んでやった。死んではいるはずだ。多分。

「これにて、俺、澄川拓人、対、ギーシュ・ド・グラモンの決闘を終わる！俺は帰つて寝る！」

何故か口を開けたままにしているルイズのところまで歩いていくと、ルイズはこちらを見ようともしない。

「おい、どうした？帰らないんだつたら、先に帰つちやうぞ？」

「あ、あんた・・・。あ、あんなに強いなんて聞いて無かつたわよ

！」

「えつ、だつて聞かれなかつたし・・・。」

「ああ！もう！いいわ！帰るわよ！」

「あいあいさー。」

ビシッと敬礼して言つてやつた。

帰る際に、観客がずっと、黙つてこちらを見ていたので、軽く御辞儀をしてから帰つた。

第三話、のよつなもの。（後書き）

ヒヒヒと拓人くん覚醒させたかったんだ。すまない。

第四話、のよみがわの。(前書き)

久々の投稿です。

第四話、 のよくなもの。

今日はいつたい何をしているのかな？

「ふ、ふふ・・・やつたぜ・・・今日から俺は始まるんだ！」
俺はルイズパンツを白昼堂々天に掲げてそう叫んだ。

心配することはない。だって今は授業で誰もいな・・・。

;

いたよ。いましたよ。シエスタが

「思ひ切らぬ事で、お詫びを」

「ひい、ハ!! す、小ませんでし、た!!」

シエスタはもう言ひ飛ぶよひにし

「ごめん、シエスタ。」つまるしかなかつたんだ……。

それで、それで詰もいなくなつたな。

すると何とも言えない虚無感が俺を襲つた。

一俺マジでなにしてるんだろ・・・。

こんな格好で落ち込める後はハシゴを口にしなれた

普段と吐き出してパンツを洗う作業に入る。

そこで豆電球が俺の頭の中で光ったような気がした。

これは湯れなくて良くれ。」

いや、それはダメだろ。俺の中の天使がそう言つた。

おいおい、何言つてんだよ。まだたくさん洗わなきゃいけないパンツがここにあるんだ。一つぐらいバレないつて。俺の中の悪魔がそう言つた。

いやいやいや、ダメなものはダメだろー。俺の中の天使がそう言つた。

「おい天使、ちょっと黙つてろ。俺もう決めたわ。もう覚悟決めたから。」

お、おう。やつぱり君は偉いな。こんな悪魔は放つておいて早く全部洗っちゃおうよ。俺の中の天使がそう言つた。

「俺がなめたパンツをルイズが穿く、つまりそれは俺がルイズのアレを舐めているということであつて……クンニ。これは間接クンニ……」

「ちょ、ちょっと良いかい？き、君は一体何を言つているんだい？俺の中の天使がそう言つた。

「ちょっとどうるさいから消えてろよ。」

「き、君は天使である僕を怒らせ……や、やめて。やめてください。死にたくない……」

拓人くんにまとつていたオーラが黒くなつた気がした。
・・・・・俺の中の悪魔は何も言えずにいた。

「さて、洗うか……これ、以外な。」

少し湿つていてるそのパンツを頭から被り、しつかりパンツの匂いを満喫しながら残りのパンツを洗つた。

乾かすのに時間が掛かりそうだったから自慢のチート能力で何とかしました。

部屋に戻つてクローゼットに畳んで入れ、替えの下着としてあのパンツを机の上に置いておいた。

ワクワクが止まらないZE

だがこれはパンツ魔神誕生のプロローグに過ぎ無かった……。

第四話、のみんなの。 (後書き)

パンツイベントをもした。

パンツとチートが交差するとも、物語は始まる。

第五話、のよつなもの。(前書き)

まつたり更新。

感想とかよろしく。

返事できないかもだけど・・・。

第五話、のみづなもの。

やあ、みんな。僕がある有名なあの人だ。
え？誰だよソイツって？

き、君はある人を知らないのかい？

頭の良い君ならわかつたと思うんだけどな・・・。

そうだよ・・・。僕が・・・、ともだ・・・。

違うよ。僕はイーグアルディだよ。

ごめん、嘘だよ。僕は・・・、何か飽きたわ。

え？結局誰かつて？

みんな大好き拓人くんだよ。

とかやつてたら今日という日がきました。

ところで僕はここに来てから何日たつてんだ？

いつデルフを買いに行くんだよっていうね。

なんやかんやで一日が終わつた・・・。的な描写が全く無いから曜

日感覚が全く無いぞ。

ていうか、こりにのつてメタ発言つて言つのかな？よく知らない
けど。

まあいいや。

ルイズの失敗魔法も見てないし、こりやパンツパンツ言つてられな
いな。

そういうえば何で僕はこんな馬小屋みたいな所で寝てるんだ。

もしかして使い魔の小屋かな。

使い魔としての仕事を洗濯しかしてないとかマジで何やつてだらう
な。

一回、授業でも見に行こつか・・・。

歩き回っていたら、教室と思わしき所があつた。

ここかな、と思って窓から中を見ると、激しい爆発音と共に、僕の視界が白く染まつた。

いてて・・・。どうやら今日が鍊金の授業だつたようだ。時系列おかしいな。もしかしたら鍊金の授業じやないのかもな。だつてどんな魔法でも爆発するし。

そんなことより、思いつ切り木に頭をぶつけちまつた。ついでに、今度は視界が真つ赤だ。

何だこれ、血か・・・？

拭こうと思い、手を額に当てるとい、痛つ、どうやら窓の破片が無数に刺さつているようだ。

「これは診てもらつた方が良いかもしねんな。」

でもどうやつて？

シエスタでも探すか・・・あ、シエスタには前に酷い事をしてしまつたんだつた。

「やべえ・・・、何だか意識が朦朧としてきましたよ・・・。」

バタツ。文字通り木の根元に倒れてしまつた。

はたしてどうなる

第五話、のよみがせの。 (後書き)

短いね。

しかも、出来れば続くよいつにしたくなかったんだけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1160s/>

残念な使い魔

2011年6月4日16時22分発行